

## 新約聖書 ルカによる福音書 4章 21節—30節（新共同訳）

<sup>21</sup>そこでイエスは、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と話し始められた。<sup>22</sup>皆はイエスをほめ、その口から出る恵み深い言葉に驚いて言った。「この人はヨセフの子ではないか。」<sup>23</sup>イエスは言われた。「きっと、あなたがたは、『医者よ、自分自身を治せ』ということわざを引いて、『カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが、郷里のここでもしてくれ』と言うにちがいない。」<sup>24</sup>そして、言われた。「はっきり言うておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ。<sup>25</sup>確かに言うておく。エリヤの時代に三年六か月の間、雨が降らず、その地方一帯に大飢饉が起こったとき、イスラエルには多くのやもめがいたが、<sup>26</sup>エリヤはその中のだれのもとにも遣わされないで、シドン地方のサレプタのやもめのもとにだけ遣わされた。<sup>27</sup>また、預言者エリシャの時代に、イスラエルには重い皮膚病を患っている人が多くいたが、シリア人ナアマンのほかはだれも清くされなかった。」<sup>28</sup>これを聞いた会堂内の人々は皆憤慨し、<sup>29</sup>総立ちになって、イエスを町の外へ追い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。<sup>30</sup>しかし、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた。

※第1朗読と第2朗読は末尾に掲載

## 説教「故郷」

本日の福音書には、霊の力に満ちたイエスが故郷を訪れた時の出来事が記されています。人々は、安息日の会堂にて、イエスから授かった恵み深い言葉に驚嘆したものの、そのあとイエスにつまずきました。ここで言う「つまずく」とは、疑いを持ち、信じられなかったということです。

イエスが「ナザレの大工職人ヨセフの子」であることに人々の意識が向き、イエスへの賛美が、蔑（さげす）みとつまずきが変わっていったのです。昔からイエスを知っている故郷の人々は、人間的なレベルでしかイエスを見ることができず、イエスを受け入れられませんでした。

イエス・キリストの恵みを受け、神の国をひととき垣間見たナザレの聴衆は、自らのうちの疑心暗鬼によって、それを失ってしまいました。彼らがつまずいたのは、イエスが「神から遣わされている」ことを認めず、イエスを「ヨセフの子」としたからです。

イエスは人々の心の中を見抜き、こう言います。「きっと、あなたがたは、

『医者よ、自分自身を治せ』ということわざを引いて、『カファルナウムでいろいろなことをしたと聞いたが、郷里のここでもしてくれ』と言うに違いない』（ルカ 4:23）。

つまり彼らはイエスに、目に見える「しるし」を要求したのです。それは、これをしてくれたならば信じてやろうという条件付きの要求です。そこには「どうせそんなことはできもしないだろう」という皮肉や侮蔑も込められていたのでしょう。

そこでイエスは、旧約聖書における二つの故事を語り、目に見える奇跡ばかりを要求する大衆の気持ちを退け、拒否するような発言をしました。

イエスの言葉を聞いて、ナザレの人々は憤慨し、総立ちになります。「憤慨し、総立ちになって」という表現から、人々の凄まじい怒りが伝わってきます（ルカ 4:28-29）。

激昂した人々は、イエスを町の外に追い出し、山の崖から突き落とそうとまでします。イエスに対する人々の憎しみと殺意がそこにありました。しかし、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去りました。

故郷の人々は、そのようにしてイエスにつまずきました。主イエス・キリストの恵み深い言葉に驚いたあとに、つまずいたのです。彼らは、イエスの言葉やわざを神からのものとして受け入れることができませんでした。イエスの家族や生い立ちを知っていることが、かえってつまずきとなったのです。

目に見えない存在である神を信じることとつまずきとは、表裏一体です。神を信じることは、いつもつまずきを伴っていると言えるでしょう。不安や恐れ、疑心暗鬼は、私たちを、神を信じることから遠ざけます。

イエスのはのちに弟子たちに「つまずきは避けられない」と言いました（ルカ 17:1）。つまずくことのない人は、誰もいないのです。

私たち人間は、神からの導きを信じることができず、日々、あらゆる場面でつまずいてしまう時があるでしょう。

自己の内側の聖なる領域において信じていたものが、全て嘘であり幻であったと感じる時もあるかもしれません。

「はっきり言っておく。預言者は、自分の故郷では歓迎されないものだ」と言

ったイエスは、自分が生まれ育った故郷に帰れば、拒絶されることを予測していました（ルカ 4:24）。それを承知の上で、なぜイエスは故郷に行き、歓迎してくれない人々のために働きを行ったのでしょうか。

そこに思いを巡らすことは、神とはどのような存在であるのかを知る手掛かりとなるでしょう。神は、私たちがどんなに心の扉を閉ざしても、決して諦めず、見捨てることもありません。どんな時も、神は愛を止めることなく、私たちに大いなる愛と恵みを与え続けてくださっているのです。至上であり至高の愛を示される神は、私たちに愛と善を信じ、愛と善のために力を尽くすことへと招いています。

人間には、最も痛いところや、本質的な部分を突かれると怒り出すという性質があると思います。憎しみを持って、イエスを崖から突き落とそうとまでした、この時のナザレの人々もそうだったのではないのでしょうか。また私たちの心のうちにも、この時のイエスの故郷の人々のような側面があるのでしょうか。

のちに十字架上で殺される時と違って、この時のイエスは、人々の敵意や憎しみや罪を背負うことなく、人々の間を通り抜け、全く無傷（むきず）でそこから立ち去りました。

そこには、さっそうとして鮮やかなイエスの姿がありました。私たちも、気持ちが落ち込みクヨクヨしている時などに、この時のイエスの姿を思い起こしましょう。

私たちは、人生において、誰からも理解されず孤独で一人ぼっちのように感じる時があるかもしれません。しかし、そのような時こそ、魂が飛躍的に進化・成長する時であることを覚えていてください。

私たちが、どのような孤独や苦しみや迷いの中にいる時でも、神はいつも私たちを見つめ、私たちに愛と希望と恵みを与え続けてくださっているのです。

私たちは、どんな時も希望を持ち、感謝と喜びをもって神を賛美しながら、共に歩んでいきましょう。

お祈りをいたします。

天の神様。いつも私たちと共にいて、私たちに愛と希望と恵みを与えてくださりありがとうございます。あなたから受ける愛と共に、私たちがいつも喜びにあふれて生きていくことができますように。御子 主イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン

以下、本日に関連する聖書箇所（第1朗読と第2朗読）です。

旧約聖書 エレミヤ書 1章 4節—10節（新共同訳）

<sup>4</sup> 主の言葉がわたしに臨んだ。<sup>5</sup> 「わたしはあなたを母の胎内に造る前から／あなたを知っていた。母の胎から生まれる前に／わたしはあなたを聖別し／諸国民の預言者として立てた。」<sup>6</sup> わたしは言った。「ああ、わが主なる神よ／わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎませんから。」<sup>7</sup> しかし、主はわたしに言われた。「若者にすぎないと言ってはならない。わたしがあなたを、だれのところへ／遣わそうとも、行って／わたしが命じることをすべて語れ。<sup>8</sup> 彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて／必ず救い出す」と主は言われた。<sup>9</sup> 主は手を伸ばして、わたしの口に触れ／主はわたしに言われた。「見よ、わたしはあなたの口に／わたしの言葉を授ける。<sup>10</sup> 見よ、今日、あなたに／諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる。抜き、壊し、滅ぼし、破壊し／あるいは建て、植えるために。」

新約聖書 コリントの信徒への手紙 — 13章 1節—13節（新共同訳）

<sup>1</sup> たとえ、人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。<sup>2</sup> たとえ、預言する賜物を持ち、あらゆる神秘とあらゆる知識に通じていようとも、たとえば、山を動かすほどの完全な信仰を持っていようとも、愛がなければ、無に等しい。<sup>3</sup> 全財産を貧しい人々のために使い尽くそうとも、誇ろうとしてわが身を死に引き渡そうとも、愛がなければ、わたしに何の益もない。

<sup>4</sup> 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。<sup>5</sup> 礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。<sup>6</sup> 不義を喜ばず、真実を喜ぶ。<sup>7</sup> すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。

<sup>8</sup> 愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、<sup>9</sup> わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。<sup>10</sup> 完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。<sup>11</sup> 幼子だったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。<sup>12</sup> わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。<sup>13</sup> それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。

教会讃美歌 190番「主のみ名によりて」1,2節、171番「つくりぬしを」1,2,4番、181番「ここにいます」1,2,3節 253番「カルバリの十字架に」1,2,4節、151番「ひとの目には」1,2,4節